

ブラジル研修生最終報告会に

本学研修生軍司ジャクソン清一さんが発表

この度、2月25日に在南米県人会子弟茨城研修員事業「平成24年度ブラジル研修生最終報告」に本学生命環境科学研究科研修生の軍司ジャクソン清一さんが研修成果を発表いたしました。

この在南米県人会子弟茨城研修員事業（*）は、茨城県からブラジル、アルゼンチンに移住された子弟を対象に県内教育機関で研究生として受け入れる事業で、研修生の受け入れと国際親善に寄与した功績に本学でも感謝状を頂戴いたしました。

ブラジルからの研修生として2012年10月～今年2月22日まで本学の生命環境研究科にて野村暢彦准教授（持続環境学・生物機能科学専攻）の指導のもと、微生物学の研究をしてきた軍司ジャクソン清一さんが、報告会では感激して涙ぐむ軍司さんの姿に野村暢彦准教授は強い感銘を受けたそうです。（「[研究生活を通して結ばれた絆](#)」参照）

今後、本学で得た学術研究の成果をブラジルに持ち帰り、大学院で大豆の生産向上を目指す研究事業に役立てて貢献したいと軍司ジャクソン清一さんは述べています。



◆在南米県人子弟茨城研修員事業（生活環境部国際課）

趣 旨： 茨城県出身者の子弟で日本での研修を希望する者を受入れ、研修を実施することにより、県人子弟の日本語・日本文化の継承、本県との交流促進を図る。

事業主体： 県

内 容： 対 象 者 在南米県人子弟 2名

受 入 先 県内日本語学校，専門学校，県関係機関等

資格条件 中等教育を終了している者

対象年令 18歳以上40才未満

受入期間 約6ヶ月

事業開始： 昭和40年度

※筑波大学での受入れは昭和55年度から開始

今年度軍司ジャクソン清一は41人目

筑波大学で学んだ“諦めずに頑張ること”

軍司 ジャクソン 清一

ブラジルから参りました、軍司ジャクソン清一と申します。

平成 24 年度在南米県人子弟茨城研修員事業のおかげで 5 ヶ月間、筑波大学生命環境科学研究科、微生物機能利用学研究室、野村暢彦先生の研究室に受け入れて頂きました。

日本の研究室に新技術が多く有る事は知っていましたが、新しい共焦点顕微鏡を二つ導入していた研究室には驚きました。

私にとって国際学会の感じ、研究室で筑波大学、東京大学、アメリカのマサチューセッツ工科大学、フロリダ州立大学の研究者の発表を聞く事が出来ました。研究室で得た実際的な知識、実験に関する計画の立て方、結果に対する議論はとても重要だと思いました。

研究室に親切な方々が居て、話しをかけてくれたり、大学以外の活動にも色々誘ってくれました。研修は短い間でしたが、友達が出来て、日本人の気持ちは私に伝わりました。幸になって自分の夢を信じて諦めずに頑張る、それが筑波大学の第一の印象になりました。



研究生活を通して結ばれた絆

～お客さんでなく、ひとりの研究室の学生として～

生命環境系准教授 野村暢彦

軍司ジャクソン君はブラジルの大学を卒業し、当研究室に微生物研究の基礎を学ぶため来日しました。彼は将来的には母国ブラジルの大学でバイオマスエネルギー（微生物・植物を利用したエネルギー生産）研究について博士課程に進学し PhD（博士）取得を目指しています。そこで、当研究室において、微生物の扱いから分析・解析技術などの基礎技術の習得とともに、考察能力さらに展開能力についてもゼミに参加（発表）を通じて養いました。

当研究室は、学部の4年生（卒研）から修士・博士課程・博士研究員まで総勢20人の大所帯ですが、2週間に1度全員による研究進捗報告会を行います（全員プレゼンテーション形式）。ここでは、厳しい指摘また議論が全員の発表それぞれで展開されます。学生はそれぞれで能動的に研究を進め、さらに、その成果を（ほとんどの学生が）毎年国内だけでなく海外の国際学会で発表いたします。

そのような状況ですから、当初、ジャクソン君はお客さんの（指示待ち（受動的状態））な位置づけで、学生達も本当の意味で深い関わりは薄かったと思います。しかし、1ヶ月もしないうちにジャクソン君から、「自分もゼミで発表したい」と言ってきました。そして、チューターの伊藤聡志君をはじめとする学生達と研究の展開を議論しながら能動的に進めるようになりました。発表も毎回、日本語でしっかりと行いました。そのような積極的な姿勢、それにともなった研究態度・生活に、学生達はしだいにジャクソン君を「お客」でなく「仲間」として接するようになりました。

毎年3月に、修士・博士ら卒業生（学部は毎年全員修士進学）のための送別会旅行を行っているのですが、学生達から「今年はジャクソンがいる間に行きたい」と申し出があり、2月に福島の熱塩温泉での一泊旅行を行いました（震災復興も含み）。毎年、夜の飲み会での卒業生達の挨拶では、卒業生のみならず他の学生達も贈る言葉と共に涙となります。ジャクソン君は滞在が5ヶ月にもかかわらず、他の卒業生達とチューターの伊藤君ら学生達もジャクソン君の言葉に涙していました。お互いが研究を通じて深く交わることで（もちろん遊びも）、本当の交流が出来たのだと思います。

これもジャクソン君の人柄、そして学ぼうとする姿勢など彼の人間性だと思います。彼は日系4世ですが、現代の日本人が忘れて何かを持っているようです。それは彼に接した学生達、また教職員も言うておりました。それが何なのか具体的に述べる事が出来ませんが、ただ幸せに生きるのには頭の良さなどよりも重要な気がします。

そのようなことを感じさせてくれたこと自体、そして、それを気付かせてくれたことに彼に感謝したいと思います。

最後に、このような機会を与えてくださった本事業関係者のみなさまに感謝いたします。

ありがとうございました。